

校内研究会 0611

平成 26 年 6 月 11 日（水） 第 4 回校内研究会

中学年分科会授業提案

第 3 学年 道徳 主題名「本当の友だち」 2-(3) 友情

資料名『友だち屋』（文溪堂） 指導者 磯部 理恵 中野 翔太（3 年 2 組にて 6 月 5 日実施）

《授業の様子》

- 導入 友達という存在について確認する。
「みんなにとって友達ってどんな人かな？アンケートの結果をお話しします。」
- 展開前段 資料を聞いてキツネの気持ちについて考える。
「イチゴを飲み込みながらうなづくキツネはどんな気持ちだったのでしょうか。」
「オオカミとトランプをしているキツネはどんな気持ちだったのでしょうか。」
「オオカミに『それが本当の友だちか』と言われてキツネはどんな気持ちになったでしょう。」
役割演技でキツネの気持ちを考える。
「スキップしながら家へ帰るキツネはどんな気持ちだったのでしょうか。」
- 展開後段 今までの自分を振り返る。
「本当の友達とはどういう友達のことですか。」
友達がいて良かったことをワークシートに書く。
- 終末 わたしたちの道徳 70P を読む。



《指導の工夫》

(1) 役割演技による価値理解

役割演技を取り入れ、キツネの役になることでキツネの気持ちを考えさせることにした。理由は、3 年生は頭と体を使って考えたり表現したりすることが大好きな学年だからである。考えたことを表出しやすいように、続きのセリフを相手のオオカミに伝える形で行うことにした。

(2) 学習過程の工夫

導入と関連させて、展開後段で「本当の友達とはどんな友達か」と問いかける。そのことにより、この学習を通して友達に対する意識の変容を見取ることができるのではないかと考えた。



《協議会》

(1) 分科会提案

(2) 自評

①3 年 2 組

- ・展開後段で「友達と心が通じ合ったことはどんなことですか」と問うた。資料の内容では、心が通じ合うことは理解できるが、自分のことを振り返るとなると難しかった。
- ・「それが本当の友達か」おおかみの言葉は、きつねのためを思って言ったもの。それを考えさせるところが難しかった。
- ・おおかみのような友達が、3 年生のまわりにいない。児童の実態のずれがあったか。

②3 年 1 組

- ・3 年生という学年は、体を使って考えていくということがあっている。
- ・役割演技によって、一人一人にその立場に立たせてみたいと考えた。台詞を精選した。
- ・展開後段の発問「友達がいてよかったこと」を問うたが、「心が通じ合った経験」について問うてもよかったか。

(3) 協議

【視点1】 役割演技について

- ・小道具がよい。盛り上がり、活気のある雰囲気だった。のびのびと全員が参加していた。
- ・役割演技を始める前に、見る視点、考える視点を伝えて始まるとよい。
- ・せりふだと一言で終わってしまう。その言葉の裏の心情を引き出す工夫をしていた。
- ・先生がおおかみ役をやって、子どもに何度もきつねをやらせても良いのでは。

【視点2】 児童の変容について

- ・展開後段に入る時に、板書で友達について押さえたことで、全体がとてもよく理解できた。
- ・両方が友達だと思っていないと、友達ではないのか。
→一方的ではなくて、お互いに思いあうのが本当の友達。広い意味の友達では、一方的なこともあるが、今回は、中学年の友情のねらいとして本当の友達を考えさせたかった。
- ・展開後段では、概念を書くのか経験を書くのかをはっきりさせるべきだった。
→教師の意図としては、経験を書かせたかった。

《指導・助言 練馬区教育委員会指導主事 吉田 松寿 先生》

- ・教室内外の掲示物が整っている。
- ・ICT活用のために、廊下の光を遮る遮光カーテンがあると良い。
- ・小道具が素晴らしい。子どもの心をひきつけていた。



《指導・助言 文部科学省教科調査官 赤堀 博行 先生》

【指導案】

- ・道徳の内容+道徳的心情を育てることをねらいとしている。指導案の中では、本当の友達の意味に気付かせること、友達を理解し信頼し合おうとする心情を育てること、2つのねらいが錯綜している。
- ・各教科等での指導では、したことだけでなく、どんな指導を行ったのかを具体的に書く。
- ・「意識を変容させること」は、道徳の時間の目的ではない。

【授業の流れ】

- ・導入はよい。短時間で明確であった。
- ・資料提示はよい。範読ではなく読み聞かせだった。子どもは引き込まれていて、登場人物を近くに感じ、自分とのかかわりで考えられていた。だとしたら、内容の確認は程々でよい。自分とのかかわりで考えようとしているのに、資料の内容に引き戻されてしまう。
- ・第1発問：何を問いたいのか、をはっきりさせる。自分とのかかわりで考えているからこそ出てくる「本当は嫌いかもしれないけれど、2人でいると楽しいかもしれないな」のような反応も大事にしたい。
- ・第2発問：きつねはトランプをしていて楽しかったのか。子どもによって多様である。
- ・第3発問：「なった」は結果、「だった」は過程。どこを考えさせたいのか。何を問いたいのか。自分とのかかわりで考えさせると、きつねの言葉を自分の気持ちを重ねて言うことができる。
- ・第4発問：友達のよさに気付かせる発問だった。
- ・「本当の友達」について後段で知的理解を求める問いをするなら、中心発問の場面でのおさえをしっかりと。

【役割演技】

- ・役割演技は即興性が大事。事前に考えてからやるのでは、役割演技のよさはない。即興性で大事になってくるのは、自分の経験。自分とのかかわりで、発言する。
- ・①ウォーミングアップ（雰囲気作り） ②条件設定、演技を見る視点を与える ③即興性の演技 ④演技の終了と話し合い ⑤役割交代 という流れで行う。
- ・条件設定の時に役割をしっかりと決め、きつねのかぶりものをさせるのは先生。役になりきらせ、終わった時にもちゃんと役を解く。これにより、子どもたちはのびのびと演技できる。